

ヴァイオリニストTAIRIKUの戯言

〔第24回〕

弦が揺れると、僕は季節の風になる

+ 文 佐田大陸 Text by Tairiku Sada +

演奏家における他者性について

サービス業における他者性は、当然のことながら非常に高い。

八百屋さんがお客さんを相手にする時、YouTubeがコメント欄に添えて内容を改善し、発信していく時。逆にアニメやゲーム、特定のキャラクターや偶像にのめり込んでいく時、オタクの他者性は低い。

どちらが良いとか悪いとかという話ではないが、その前提があった上で、自分が今やっている活動、演奏家はど

うだろうとふと思う。僕は元々内向的な性格で、気質としても何かに没頭していくのが好きなので、他者性は低い後者のタイプだと思っています。

では自分のやっている活動はどうだろうか。

まず、学んできたクラシックというフィールドが独特です。偉大な作曲家が遺した曲を演奏するという再現芸術というのが前提にあるため、例えばベートーベンのシンフォニーを全身全霊で表現する。

その時、そこに聴衆がいるという意味では他者性が発揮されているのですが、奏者側のメンタリティとしては、自己の世界に忠実に没頭すればするほど他者性は低いです。しかし、身も心

も音楽に捧げている場合は、神に捧げているわけですから、これまた他者性が非常に高くなります。

そもそもクラシック音楽は元々パトロンによって成り立っていたので、食べる食えないにかかわらず、今よりも商業の色は薄く芸術に特化していられたと考えられます。

話を現代の日本に戻すと、音楽家がサービス業と言われるようになってから久しいですが、その理由として、時代性もあると思いますが、年々不景気で全国的に集客も減り、「我は芸術家でごさい」と踏ん返り返っていられる時代では無くなったということでしょう。

そうすると芸術と商業との狭間で音楽をやっている人が非常に多くなる。

そんな中、人気の某アーティストが、「ビジネスなんて考えたことがない、ただ自分が楽しい事をやっているだけ」と言っていたのが印象的でした。

ニーズを特に考えず、純度高く自分が好きな音楽に突き進み、自分が楽しんで、そこにお客さんが付いて来て集客が出来ている。

ただその考え方は、多くの努力をそして一握りの才能と運に恵まれるのが前

提で、生き残れるのはごく僅かだと感じています。

普通は求められ、承認されれば意思と関係なくそこになびく。僕もそんな弱さを感じ、自分の悪い意味でのノーマルさを痛々しく感じる事も多いです。その何が悪い、と大半の人は思うはずですが、僕はやはり気質としては仕事でもオタクを全うしたいと思う今日この頃です。

テレビをはじめとして、知らず知らずのうちに毎日恐ろしいほどの他者の思考が自分の中に入り込んでくる。

自分自身にちゃんと向き合い、正直に表現したり生きたりするのは難しい。



profile

2010年3月に桐朋学園大学音楽学部大学院を修了。
2 ヴァイオリンとピアノのアンサンブル・ユニット「TSUKEMEN」のヴァイオリニストでリーダー。
2010年キングレコードからメジャーデビュー。
結成9年目にして450本以上の公演を海外や日本全国各地で開催、現在までにのべ35万人を動員している。